

第13回 経営戦略学会に参加して

九州産業大学 真木 圭亮

2013年3月16日、慶應義塾大学日吉キャンパス（神奈川県横浜市）において、第13回経営戦略学会が開催された。大会では5つの報告とひとつの特別講演、そしてシンポジウムが行われた。

今大会の報告の特徴は、さまざまな方法論に基づいた多様なものであったという点にある。黄雅雯氏（早稲田大学大学院）による台湾を代表するEMS(Electric Manufacturing Service)である鴻海の特許データを用いたケーススタディ、小川長氏（尾道市立大学）によるゲーム理論の援用した演繹的研究、そして山野井順一氏（中央大学）、犬塚正智氏（創価大学）、青木英孝氏（千葉商科大学）のそれぞれによる統計的手法を用いた実証研究と、方法論的にバラエティに富んでおり、そのいずれもが今後の経営戦略論、そして経営学の行方を占う上で、非常に意義深いものであったと言えるだろう。

昼食を挟み、慶應義塾大学の浅川和宏氏による、「グローバル・イノベーション研究における実証的課題」と題された特別講演が行われた。グローバルな環境下でのイノベーション、そしてそれを対象にした研究の意義と実証面での難しさについて、浅川氏は本質を逃すことなく、しかし時にはユーモアを交えながらお話くださった。浅川氏が提示された実証的課題を乗り越えていくことができるか。これは講演の聴衆としてその場にいた私たちに等しく課せられた課題であろう。

最後に、「Strategy as Practice の可能性をめぐって」と題されたシンポジウムが行われた。宇田川元一氏（西南学院大学）、宇田理氏（日本大学）、黒澤荘史氏（山梨学院大学）の3名の気鋭の若手研究者が、それぞれの立場から Strategy as Practice の持つ可能性について論じた。聴衆からも盛んに質問や、時には懐疑的なコメントも発せられ、ありがちな予定調和的問答に終始しない、刺激的な場となった。

総じて、今大会は幅広い研究動向について知ることのできる、意義深いものであった。特に私のように、日々の業務に忙殺され、なかなか十分な研究の時間を確保できない者にとっては、焦りを覚えるほどに刺激的であった。2014年3月15日に創価大学（東京都八王子市）において開催される第14回経営戦略学会も、今大会同様に刺激的なものであることを願うばかりである。